



## 閉校にあたり

岩手県立福岡高等学校長

目 時 一 哉

遡ること六十八年前の創立以来、自然と文化に  
 充ち溢れた故郷とともに輝かしい歴史と伝統を積  
 み重ねてきた岩手県立福岡高等学校浄法寺校は、  
 平成二十八年三月末をもって岩手県立福岡高等学  
 校と統合し、閉校することとなりました。これま  
 で浄法寺校の教育活動をお支えいただいた同窓  
 会、PTA、学校関係者並びに二戸市ご当局をは  
 じめ地域の皆様には衷心よりお礼申し上げます。  
 時代の趨勢とはいえ、浄法寺校の校史に幕が下ろ  
 されることは、浄法寺校最後の卒業生と私も教  
 職員一同にとりまして、惜別の情を禁じ得ません。  
 また、浄法寺分校、浄法寺高等学校及び浄法寺校  
 の卒業生諸氏、そして旧二戸郡内とりわけ旧浄法  
 寺町民の皆様には、深い寂寞を感じておられるこ  
 とと拝察申し上げます。

浄法寺校の前身は、昭和二十三年、地元有志の  
 熱意と尽力により、浄法寺町立青年学校跡地に  
 岩手県立福岡高等学校定時課程浄法寺分校とし  
 て誕生しました。五十一名の生徒が入学を許可さ  
 れ、昼は黙々と仕事に汗を流し、夜は暗い電灯の  
 もとで学業に打ち込んだといえます。その後、昭  
 和三十八年に浄法寺中学校隣地に校舎を建設移  
 転、昭和三十九年から昼間授業に切り替わり、昭  
 和四十七年には全日制分校へと装いを整え、幾多  
 の危機を乗り越えながら遂には地域の大きい願  
 望と期待を結実させ、昭和五十年に岩手県立浄法  
 寺高等学校として独立を果たし、現在地に新校舎  
 が完成したのであります。爾来、地域の教育振興  
 の中核たる地歩を固め、多数の有為な人材を世に  
 送り出してまいりました。しかしながら、過疎化  
 と少子化など学校を取り巻く環境の変容により生  
 徒数が減少し、平成二十年から福岡高等学校浄法  
 寺校として分校に再編され、平成二十六年度には  
 生徒募集停止に至ったのであります。

浄法寺校は、浄法寺高等学校の校是「自強不息」

「自勝者強」を継承してまいりました。前者は「易  
 経」の「易曰天行健 君子以自強不息」（易に曰  
 く、天行健なり。君子はもって、自ら強へつと）  
 めて息（へ）まず。）の一節で、自らの不断の努  
 力が大切であるとの意であります。後者は「老子」  
 の「知人者智 自知者明 勝人者有力 自勝者  
 強」（人を知る者は智なり、自らを知る者は明な  
 り。人に勝つ者は力あり、自らに勝つ者は強し。）  
 から引用されており、己に勝つところが真の強  
 さであるという意味合いであります。大相撲で活  
 躍された栃乃花関は申すまでもなく、高総体で優  
 勝十一回という偉業を誇る相撲部、インターハイ  
 で活躍したソフトテニス部とスキー部及び県民体  
 育大会優勝を飾った弓道部の先達など、歴代の  
 二千八百六十七名に及ぶ卒業生諸賢は、まさに「自  
 ら進んで努め励み怠らない、自分自身に打ち勝つ  
 本當の強さ」を具有していたと確信するところで  
 す。

最後の一年となった本年度、九人の生徒が、後  
 輩のいない侘しさと閉校を迎える切なさや撥ね  
 除け、有終の美を飾るべく学業と部活動や学校行  
 事などを真摯に取り組んでまいりました。卒業後  
 もお世話いただいた皆様への感謝の気持ちを忘れ  
 ることなく、必ずや故郷はもとより日本と世界の  
 持続可能な発展に寄与し、二十一世紀を逞しく切  
 り拓く人材として活躍してくれるものと存じてお  
 ります。

閉校にあたり、ここまでご教導とご協力を賜り  
 ました「岩手県立福岡高等学校浄法寺校閉校事業  
 実行委員会（三浦利章会長）」並びに関係各位に  
 深甚なる敬意と謝意を表する次第です。浄法寺校  
 が皆様の脳裏に幾久しく在り続けることをお願い  
 申し上げますとともに、地域の永続的発展と皆様方  
 のご健勝を心からお祈り申し上げます、ごあいさつと  
 いたします。



## 閉校記念誌の発刊に寄せて

二戸市長  
藤原 淳

雄大な稲庭岳を背景に、古刹天台寺の歴史と文化が薫るこの地において、三千有余名の生徒がその門を巣立っていった岩手県立福岡高等学校浄法寺校の閉校にあたり、ご挨拶を申し上げます。

本校は、昭和二十三年四月に岩手県立福岡高等学校定時制浄法寺分校として創立されました。

その後、昭和四十七年には、地域住民の教育への熱意により、全日制への昇格を果たし、昭和五十年には岩手県立浄法寺高等学校として独立校となりました。

平成二十年には、少子化など社会環境の変化に伴い、福岡高等学校浄法寺校へと移行するなど、幾星霜を経て、実に六十八年の永きにわたり、本校は、地域の教育を担い、営々とその伝統を築いて参りました。

これまで、本校の教育を支えていただきました歴代の校長先生並びに教職員の皆様方をはじめ、同窓会・PTAの方々、そして地域の皆様方とともに、あらためてこれまでの歩みを顧みますとき、感無量の思いが込み上げて参ります。

「自彊不息・自勝者強」の校是のもと、本校で学んだ卒業生におかれては、各界・各層の有為な人材として活躍をされています。

特にも、相撲においては、角界入りを果たして活躍された、元小結・栃ノ花関を筆頭に、全国区で活躍する選手を多数輩出するなど、時代に名を刻んでこられました。その歴史を背景に、浄法寺地域では、相撲が小学校行事、あるいは地域のお祭りにおける行事としても定着しており、地域文化として息づいております。

今日、時代変化の激しい中で、本校がその輝かしい校史を閉じることになりましたことは、誠に残念であり、愛惜の念を禁じ得ませんが、これまで本校が育んだ、人材・文化は、今後においても、必ずや地域を支え、発展させる礎となっていくものと確信しております。

結びに、これまで岩手県立福岡高等学校浄法寺校にお寄せいただいた多くの皆様方の温かいご理解とご支援に、心より感謝を申し上げますとともに、卒業生並びに関係各位の皆様方の今後のご活躍とご健勝を祈念申し上げ、閉校にあたってのあいさつと致します。

## 我が校に感謝、ありがとう

閉校事業実行委員会会長（同窓会長）

三浦利章



福岡高校浄法寺校の閉校にあたり、これまで、本校生徒を温かくご指導してこられました先生方、PTAとして共に本校を支えてこられたご父兄の方々、行政当局並びに地域の皆様方、同窓生の皆様方には、これまでのご支援助とご協力で衷心より厚くお礼申し上げます。

我が校は、昭和二十三年福岡高等学校校定時制浄法寺分校として、働きながら学ぶ夜間定時制が浄法寺青年学校跡地に開校して以来六十八年という歴史を刻み、これまで二千八百六十七人の卒業生を社会へと送り出してまいりました。

昭和三十九年に昼間定時制に改変され、その後、四十七年には全日制分校に改められました。四十四年には入学者減のため廃校の対象となりましたが、地域の方々や在校生、町当局が一丸となり存続運動を展開し、危機を乗り越えてまいりました。地域の教育振興を進め、有為な人材を育成していききたいという地域の方々の熱意により昭和五十年四月に全日制普通科の単独校として独立し、三十三年間有為な人材を育ててまいりました。少子高齢化社会の到来と共に生徒数が減少し、市町村合併により浄法寺町から二戸市へと社会情勢が変化するなか、平成二十年四月からは、浄法寺高校から福岡高校浄法寺校へと再編され、再び福岡高校の分校として再出発しました。その後、生徒数の減少により平成二十六年度に新入生募集停止となり、本年三月に最後の卒業生九名をもってこれまでの歴史に幕を下ろすこととなりましたが、浄法寺の地に

開校以来、これまで幾多の紆余曲折を経ながらも、地域の方々をはじめとする皆様方の教育に対する熱意に支えられて今日まで来たものと、心から感謝をいたしております。

夜間定時制の時代より、決して良い学習環境とは言えない中でも学習に情熱を燃やした先輩諸氏に支えられながら独立し、「自彊不息」「自勝者強」の校是のもと「正しく、明るく、素直」な、「小さくともキラリと光る」校風で進学や就職に実績を積み重ねてまいりました。部活動においても、それぞれの部が数々の優勝、入賞を果たしてまいりました。昭和五十年、独立校となった年に弓道部が県民体育大会初出場、初優勝という快挙を成し遂げました。相撲部は、平成七年に高総体十一回目優勝、四連覇、県民大会十三連覇という偉業を成し遂げるなどこれまで素晴らしい活躍をしてまいりました。

このように素晴らしい実績を積み重ねてこられたのは、ひとえに生徒一人一人を大事に親身に指導、導いて下さいました諸先生方並びに指導者皆様のご努力によるものであります。厚くお礼を申し上げます。

最後に、我が校の歴史は閉じることとなりますが、我が校で培い学んだこと、その精神はこれからも一人一人の卒業生、同窓生にしつかりと生き続けてまいります。これまでお世話になった先生方をはじめ、すべての方々に、そして我が母校に、同窓生を代表して衷心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。



## 閉校に寄せて

閉校事業実行委員会副会長（教育振興会長）

堀 口 貢 佑

浄法寺高校の閉校にあたりペンを執ります。時代の流れとはいえ、まさか自分の代で浄法寺高校を閉じる役目になるうとは思ってもみなかった事です。

教育振興会は、学校創立の昭和二十三年に設立されたと聞いております。

その時々々の高校の要望を側面から支えることが目的であり、独立校舎建設の要望活動やクラブ活動の充実、生徒募集の支援等々であります。歴代の浄法寺町長がその職に就き、物心両面、特に予算確保に尽力・支援してきました。私も清川町長（前副市長）から引き継ぎ、平成二十二年度より会長職をおおせつかってきました。清川会長時代、生徒募集のため二戸管内の各中学校を回った話を度々聞いたものです。

岩手県教育委員会の高校再編方針が新聞等で報じられ、存続が危ぶまれ入学希望者が激減しました。残念ながら県教委の方針が募集停止と決まり、統合計画がマスクミ等で報じられた年の入学式に出席し、たった四人の入学者に立ち会い、市長代理の祝辞で思わず絶句したことを昨日のように思い出します。

私たち教育振興会の力及ばず生徒減少を招いたことに責任を感じますし、今現在の県教委の方針がもっと早く示されていれば、「小さ

くともキラリと光る」浄法寺高校は存続できたのでは…との思いは尽きません。

私の場合は、昭和五十年独立の頃から相撲部と関わってきたのでどうしてもその思い出が脳裏をよぎります。歴代の監督さんや相撲部員の顔々、生徒勧誘に行った先々、特に栃乃花や青森県の生徒のこと、下宿の世話、相撲の指導や国体監督のこと等限らない思い出があります。特に北館先生の死亡は初めて岩手の監督になった国体前の合宿中の出来事であり、京都国体には遺影を抱いて臨んだ忘れがたい思い出です。また、選手の活躍では石川国体での舛田君、泉山君の大活躍による少年団体準優勝、福島国体での越田君、蛇口君、前川君の少年団体第三位、そして富山国体での浄高OBトリオ、谷地君、越田君、小田島君の一般団体優勝など思い出は尽きません。いま岩手県内高校相撲を指導する先生方全てが浄高相撲部OBであることも特筆すべきことです。

最後に、繰り返しとなりますが県教委の方針が早く出ていればまだまだ相撲部の輝かしい歴史は続いていただろうと思うと残念でなりません。「栃乃花の母校を消していいのか」との思いを抱えつつペンを置きます。



## 閉校にあたって

P T A 会 長

田 口 和 則

昭和二十三年、福岡高等学校浄法寺分校として創立された本校は、昭和五十年、地域の熱い要望により独立校として開校しました。それからの数十年、浄法寺高の諸先輩方は勉強やスポーツに活躍されてきました。小さな町や村の高校がいずれもそうであるように、浄法寺高も開校当初から地元の浄法寺町と深く密接な関係を保ち、共に歩んできました。

そんな浄法寺高も少子化の影響に伴い、平成二十年、福岡高等学校浄法寺校として再出発することとなりました。分校化の際にも「浄法寺高」という校名、制服、校歌など様々なものがなくなってしまうことに在校生たちは寂しい思いや悔しい思いを抱いたことと思います。現在の三年生も自分たちが入学したのと同じ年に「募集停止」「閉校」が決定し、「後輩ができないのか」「自分たちで学校が終わってしまうのか」と残念な思いをたびたび口にしておりました。三年生までが揃って二十四名でスタートした高校生活でしたが、一年、二年と先輩を送り出すたびに人数が減り、その一方で使わない教室が増え、やりたいたことが制限されていくもどかしさや寂しさは、最後の卒業生である今の子供たちにしか分からないものだと思います。しかし、子供たちはこの「小さくともキラリと光る」学校を最後まで輝かせてくれました。

生徒数が少ないことで開催は難しいと思わ

れるような行事には、子供たちだけではなく先生方も参加し、それでも足りなければ地元に残った卒業生に参加してもらおうことでほとんどの行事を削ることなく開催してきました。

「体育祭」には我々PTAも全員参加し、丸一日親も子もいい汗を流し、昼食時にはみんなでカレーを作りました。「文化祭」では子供たちが地域の伝統文化である「浄法寺太鼓」を披露しましたが、私たちPTAのほとんどが自主的に応援にかけつけ、飲み物の差し入れなどを行いました。また、地域の連絡協議会でこの浄法寺太鼓を披露したときには「浄法寺校として最後の演奏です」とのナレーションが入り、演奏が終わると同時に地域の皆様から「アンコール！」のかけ声がかかりました。子供たちも地域の皆様に恩返しのもりで「ぶっつけ本番の新曲」を披露し、観覧した皆様から「アンコールを見て涙が出た」「とても良かった」とお褒めの言葉をたくさんいただきました。

こんなにも地域の皆様に愛され、応援されている本校が今年度で閉校となるのは誠に残念ではありますが、卒業後も子供たちはそれぞれ地域・社会に出て頑張っていくことと思います。そして、福岡高等学校浄法寺校の卒業生である誇りを胸に、浄法寺太鼓のような力強い鼓動を響かせてくれるものと確信しております。

# 学校史

